

平成28年度 コース，教育研究分野，教員の専門分野

神戸大学大学院人文学研究科
(文化構造専攻)

| コース | | 教育研究分野 | | 教員の専門分野 | |
|----------------|--|---------|---|---------|------------|
| 名称 | 内 容 | 名称 | 内 容 | 教 員 名 | 研 究 内 容 |
| 哲 学 | <p>哲学コースは、各地域、各時代における哲学・倫理学思想を研究し、その歴史的な特殊性を明らかにするとともに、それらの思想が空間や時間の制約を離れて持ちうる普遍的な意味を探究する。あわせて、この研究によって培われた方法と知見に立って現代における哲学・倫理学思想の可能性を追求し、さらに21世紀において焦眉の課題とされる諸問題に対する解決策を提示することを目指す。また、科学の理論構成や方法を内在的に分析するとともに、科学を成立せしめている論理的かつ文化的な制約を十全に理解することで、その意義と可能性を批判的に分析する。さらに哲学・倫理学以外の専門科学との交流を求め、現代における哲学・倫理学思想の有効性を探究する。</p> <p>哲学コースでは哲学・倫理学思想全般に対する展望と、哲学的文献を読解するための基本的技術の習得に重点を置くとともに、個別のテーマに即して専門的な教育研究を行う。その際、特に現代において哲学・倫理学が担う社会的責務を十分に自覚し、倫理創成論プロジェクトが提供する研究科共通科目等を通じて、現代的な諸問題を具体的に考察する能力を涵養する。</p> <p>以上のような教育研究によって、人類の英知と価値観を学ぶことを通じて培われた洞察力を活かし、科学の発展を踏まえて、現代社会の抱える諸問題を解決できる人材を育成する。また、そうした能力を次世代にも継承させる教育能力をもった専門家を養成する。</p> | 哲 学 | <p>哲学コースの特色は、自由闊達な精神と旺盛な批判精神にある。哲学・倫理学の両教育研究分野を合わせると、ほぼ全時代・全地域の西洋哲学のみならず、日本近代哲学も含む、多様な研究領域をカバーできる豊富なスタッフを擁するため、個人指導も徹底できる。哲学・倫理学の在籍者全員と全教員が参加する合同演習もあり、修士・博士論文の作成などに大きな効果を発揮している。さらに、「哲学懇話会」は、研究報告会、機関誌『愛知』の定期的な刊行などを行っている。修了後は、研究者の道に加え、マスコミ・出版関係に活躍の場を見出す学生が増えている。</p> | 松田 毅 | 近現代の認識論 |
| | | 倫 理 学 | <p>人間と社会の在り方が未曾有の変容を遂げつつある現在、「生き方の学的探求としての倫理学」には、様々な問題の原理的捉え直しと、新たな「共生のビジョン」を描き出す「倫理創成」が求められている。「倫理学」分野では、「哲学」分野とも連携しつつ、ギリシャ古典哲学から現代思想に至る主要な哲学思潮を学ぶとともに、様々な倫理的問題を考察する。また、生命・環境・工学・戦争などをめぐる問題に関し、人文学研究科のスタッフ・院生が学際的に取り組む「倫理創成プロジェクト」に参加することも可能である。</p> | 加藤 憲治 | フランス哲学・哲学史 |
| 文 学 | <p>文学コースは、人類が蓄積してきた文学作品を、テキスト分析の方法を基軸として、民俗学・歴史学・哲学・心理学等の隣接諸学域の成果をとりいれて、広い視野に立って深く研究する能力の涵養をはかる。その研究対象は、古代より近代に至る古典的文学作品から、現代の文学作品にまでわたる。その教育研究を通して、古典的文学作品の価値を現代に再生し、文学という最も普遍的で優れた文化的遺産を将来に継承するとともに、それぞれの文化的背景のもとに生成されつつある現代の文学作品の価値を、異文化圏に向けて発信することで、異文化理解・多文化共生の橋渡しの役割をも担う人材を養成する。</p> <p>本コースは、まず、日本、中国・韓国等のアジア文学、また英・米、独・仏・伊等の西洋文学の各分野について、それぞれの研究領域が築いてきた伝統を踏まえて各領域個別の研究を発展・深化させるために、古典日本語・現代日本語・中国語・韓国語・英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語等の諸言語に関わる語学力の向上を目指す。それとともに、テキスト読解のスキルや、哲学・文学理論の応用能力等の修得を行い、人文学の基盤的な学問としての文学研究を強化する。それに加えて、各国文学を横断的に教育研究することによって、多角的な視野を持った文学研究を目指す。所属の学生には、各自の専門的研究を深化させるとともに、倫理創成論プロジェクト等が提供する研究科共通科目を履修させることによって、現代社会の諸問題を広い視野から考察する方法を学ばせ、文学研究を知識基盤社会の形成に応用する能力をも涵養する。</p> <p>以上のような教育研究方法によって、文学コースでは、古典テキスト研究能力と確かな語学力に基づく分析能力により、文学的遺産を将来に継承できる人材・文化交流の架け橋となる人材を養成する。</p> | 国 文 学 | <p>日本の言語文化の特質について、また日本文化を通して見た人間の普遍性について研究する。前期課程ではテキスト解析能力の鍛錬等、後期課程では高度な研究能力の涵養等を行う。</p> <p>古典文学、近世・近代文学、国語学、日本語教育学の各分野に合わせて8名の教員が配置されており、学生の多種多様な研究テーマや進路志望に対応できるように、国語国文学の諸領域をカバーしている。教員・在学生・卒業生による学会「神戸大学文学部国語国文学会」の機関誌『国文論叢』、院生の自主運営雑誌『国文学研究ノート』等、研究発表の場も豊富である。</p> | 福長 進 | 平安時代の歴史叙述 |
| | | ○鈴木 義和 | 日本語文法 | | |
| | | ○實平 雅夫 | 日本語教育・日本文化教育 | | |
| | | 田中 康二 | 近世和歌・国学 | | |
| | | ○高梨 信乃 | 現代日本語の文法 | | |
| | | 樋口 大祐 | 日本中世の歴史叙述 | | |
| | | 石山 裕慈 | 日本語音韻史 | | |
| | | 梶尾 文武 | 日本近現代文学 | | |
| | | 中国・韓国文学 | <p>隣国である中国・韓国の文学と語学、及び文化背景を研究対象とする。授業は精確に一次資料を読むことを基本におきつつ、更に大胆な、オリジナリティのある解釈を施していくことを目標とする。学生の研究テーマは古典詩・小説、現代・同時代文学など多岐にわたっており、それぞれの関心に即して自由に論文執筆を進めていく。研究室は少人数で和気藹々とした雰囲気であり、交換留学などによる国際交流も活発に行われている。後期課程進学後は、博士論文執筆を第一の目標とすると同時に、学内外、また海外での研究会やシンポジウムで積極的に発言・報告してゆくことが求められている。</p> | 釜谷 武志 | 中国古典文学 |
| | | ○朴 鍾祐 | 日韓比較文学 | | |
| | | 濱田 麻矢 | 民国期中国の女性表現 | | |
| | | ※鄔 国平 | 中国古典文学研究 | | |
| 英 米 文 学 | <p>英米文学では、広く西洋文学を視野に入れつつ、イギリス及びアメリカの文学を教育研究の対象とする。文学テキストの生命ともいえる言葉そのものへの深い関心のもとに、文学テキストとしての英語、及び、文学をとりまく歴史的・社会的・文化的コンテクスト（文脈）への深い理解を養成し、テキスト（言葉）とコンテクスト（文脈）の交錯の彼方に、文学の存在を探究する。</p> <p>博士後期課程では、文学テキストの精緻な読解に加えて、先行研究の検証・批判と学術論文作成の訓練を行い、研究者の養成を目指す。</p> | 菱川 英一 | 英米の詩学 | | |
| 山本 秀行 | 現代アメリカ小説・演劇 | | | | |
| 芦津 かおり | シェイクスピア・イギリス演劇 | | | | |
| 奥村 沙矢香 | 20世紀イギリス小説 | | | | |
| ※アントン・アリーナ・エレナ | 20世紀アメリカ文学 | | | | |
| ヨーロッパ文学 | <p>ドイツ文学、フランス文学、イタリア文学からなるヨーロッパ文学では、それぞれの言語や文化に対する深い理解をめざした講義や研究指導が行われる。授業では、テキストの正確な理解と分析をもとに、テキストを作り上げている要因を様々な方法論を駆使しつつ、多角的に考察する。修士論文や博士論文作成の指導は、少人数ゼミや密接な個別面談を通じて、きめ細かく行う。</p> | 松田 浩則 | 現代フランス文学 | | |
| 増本 浩子 | 現代ドイツ文学・スイス文化論 | | | | |
| ○河合 成雄 | 15-16世紀イタリア思想・文学 | | | | |
| 中畑 寛之 | 現代フランス文学・思想 | | | | |
| 久山 雄甫 | ドイツ思想史・日欧文化比較論 | | | | |

備考 ○印は国際教育総合センター所属教員を示す。※印は特任教員を示す。

(社会動態専攻)

| コース | | 教育研究分野 | | 教員の専門分野 | |
|--------|--|---|---|---|------|
| 名称 | 内容 | 名称 | 内容 | 教員名 | 研究内容 |
| 史学 | <p>史学コースは、人類が培ってきた歴史学の方法を用いて歴史文化の発展に寄与することを共通の課題にしている。その上で、本コースでは、歴史学研究をいっそう展開させるために、文献研究のみならず、フィールドワーク手法を用いた教育研究を行うことを重視している。すなわち日本列島・アジア・欧米における地域社会をフィールドとし、それぞれの地域に固有の社会の歴史的動態を、実地調査、史料保存、聞き取り調査などを通じて明らかにする。</p> <p>また日本列島における各地域・時代の言語、西欧におけるフランス語・ラテン語など、アジアにおける中国語・アラビア語などの諸語を、コースの所属学生が、自らの研究領域の広がりに応じて習得し、用いる。それによって各フィールドにおける高度な学術調査をおこない、また取り扱いに習熟を要する文書・写本史料などを扱える能力を養成する。さらにフィールドの手法を充実させ、歴史研究の成果を社会に還元するために、地域連携センター、海港都市研究センターと協力し、地域の歴史文化をはぐくむ史料論と方法論、歴史博物館や文書館の運営論について深化をはかる。</p> <p>このように共通の方法論を修得することにより、日本史、東洋史、西洋史という各領域の研究を深化させるとともに、これらの既存の研究領域を超えて、人間の歴史を総体的に把握し、その史的ダイナミズムを解明することを可能にする。これによって、現代社会において、グローバルな領域やローカルな領域で相互に関係しながら展開する諸現象の客観的な理解をなさしめるものである。</p> <p>以上のような教育研究によって史学コースでは、文献研究とフィールドワーク研究という実証的分析手法をもとに、過去から現代に至る人間行動を歴史的に理解し、日本および国際社会における歴史文化の形成に主体的に対応する人材を養成する。</p> | <p>日本史学</p> <p>日本史学は、古代から現代にいたる、日本列島上に展開した社会と国家を、構造的、動的に把握することを目的とする学問である。そのためには、資史料の分析読解能力、研究史に対する深い理解、日本史学の問題を歴史学全体の中で考える広い視野、が必要である。日本史学では様々な演習を通じてこれらの能力を養成に努めるとともに、具体的なフィールドを通じて歴史像を構築する営みを重視し、地域歴史遺産を保全し、活用する能力を高める実習の充実をはかっている。</p> | <p>奥村 弘</p> <p>市澤 哲</p> <p>河島 真</p> <p>古市 晃</p> | <p>日本近代地域社会形成史、歴史資料論</p> <p>日本中世政治・社会史</p> <p>日本近現代政治史</p> <p>日本古代史、王権論</p> | |
| | | <p>東洋史学</p> <p>東洋史学の研究対象は、広くユーラシア大陸を見据えるものであるが、とりわけ中華世界とイスラム世界を二本柱としたアプローチを試みている。学生は各自が選択する言語の写本、文書、档案史料等の原典を読みこなし、分析する能力をより一層高めることによって、異文化の多元的な刺激を受けつつ視野を広め、歴史学のスキルを身につけることが期待される。</p> | <p>緒形 康</p> <p>真下 裕之</p> <p>伊藤 隆郎</p> <p>村井 恭子</p> | <p>中国近現代史、中国思想史</p> <p>南アジア史、イスラーム史</p> <p>アラブ史、イスラーム学</p> <p>中国古代史、古代東アジア国際関係史</p> | |
| | | <p>西洋史学</p> <p>西洋史学には4名の専任教員が配置されており、古代から現代にいたるまで、それぞれの時代について専門的に掘り下げて研究を行うことが可能である。いずれの時代においても、研究史の確かな把握と、自己の研究テーマをより広い問題関心や研究動向の中に位置づける幅広い知識、一次史料の読解が重要であるが、それらの習得を目指して自主勉強会、院生による読書会などが行われている。近現代においてはアメリカ、アジア、日本も含めた国際的相互関係の把握にも努めている。</p> | <p>◇天津留 厚</p> <p>高田 京比子</p> <p>小山 啓子</p> <p>佐藤 昇</p> | <p>ハプスブルク近代史</p> <p>中世イタリア・地中海史</p> <p>近世フランス史</p> <p>古代ギリシア史</p> | |
| 知識システム | <p>知識システム論コースは、人間の知識をシステムとして理解するために、言語を含む知的活動、感性、創造性、対人関係のような、人間に固有の高次機能の解明に取り組む。現在、知性を背後で支える必須の要件が感性や感情であるという認識が深まっている。このような知識システムの複合性を解きほぐすためには、伝統的に芸術学の分野とされてきた領域を含めた、新しいタイプの教育研究プログラムが必要不可欠である。さらに、情報科学や脳科学のような隣接科学と協同することにより、知識システム全般について総合的理解を有した人材を育成する。</p> <p>そのため、心と行動の特性については、心理学実験、社会調査、行動観察のような方法を用いて、感覚や運動や思考や言語のような個人の行動メカニズム、対人関係や集団活動や文化のような複数の人間の行動メカニズムについて、実証性を重んじた教育研究をおこなう。言語現象については、音声、形態、文法、意味、語用の各側面について一般化をおこない、理論的モデルを構築することによって、自然言語の全体像を組み立てる。感性的経験については、芸術の生産と受容のシステムについての研究と教育を行い、感性や感情という知識システムの深層にある部分を解明する。</p> <p>以上の教育プログラムを通して本コースでは、言語を主とする知的活動や、行動・知性を背後で支える感情・感性を、伝統的人文学の範囲を超えた科学的視点から理解し、新たな人間観の形成に寄与する人材を養成する。</p> | <p>心理学</p> <p>心理学では、感覚、知覚、運動、学習、記憶、言語、発達、社会的行動などの人間行動と、その背景にある心理を、観察、実験、調査を通じて実証的に研究している。博士前期課程で修士論文を書いた学生は、後期課程で研究を続け専門研究者として活躍したり、前期課程修了時に就職し社会に出て活躍したりしている。人材育成にあたっては、研究成果の対外発信をとりわけ重視しており、研究成果を論文にまとめて学術誌に掲載することを前期課程から奨励し、後期課程修了までに複数の論文を国内外の学術誌に掲載するよう指導している。</p> | <p>喜多 伸一</p> <p>長坂 一郎</p> <p>大坪 庸介</p> <p>石井 敬子</p> <p>野口 泰基</p> | <p>知覚心理学</p> <p>デザインの理論的研究</p> <p>社会心理学、進化心理学</p> <p>社会心理学、文化心理学</p> <p>認知神経科学</p> | |
| | | <p>言語学</p> <p>言語は人間の本質に関わる重要な現象である。この言語が、どのような構造を持ち、どのような機能を果たし、どのように習得され使われているのかを研究するのが経験科学としての言語学である。言語学には、日本語、英語など個別言語の研究とともに、音韻論、文法論、意味論、さらに、応用言語学やフィールド言語学までの幅広い分野が含まれる。理論的には生成文法や認知言語学などのいくつかのアプローチがある。神戸大学の言語学のプログラムはこれらの幅広い分野、理論をカバーする指導・研究体制をとっている。</p> | <p>松本 曜</p> <p>岸本 秀樹</p> <p>田中 真一</p> <p>○リチャード・ハリソン</p> | <p>意味論</p> <p>統語論、語彙意味論</p> <p>音韻論、音声学</p> <p>教育工学、日本語教育</p> | |
| | | <p>芸術学</p> <p>現代における芸術文化領域の多様化は、また人間の感性的経験の多様化でもある。本研究分野は、こうした多様化する芸術文化について、伝統的な学問研究方法をふまえた上で、新たな学問の地平を切り開き、来るべき芸術表現の理論的基礎づけを行うとともに広範な視聴覚文化の包括的研究をめざす。具体的には、芸術の各ジャンルの成立の通時的・共時的状況、素材と構成・内容と形式の相互関係、新たなメディアによる芸術形態や芸術編成の変化等を扱う。</p> | <p>前川 修</p> <p>大橋 完太郎</p> | <p>写真論／写真史研究</p> <p>西洋近・現代の美学および芸術学</p> | |
| | | <p>社会学</p> <p>家族、農村、地域社会、都市といったコミュニティが構成する社会の基層構造を、日本、アジア、欧米の比較文化研究を通じて明らかにする。また、アソシエーション、ネットワーク、個人の創発的活動を多様に包含する現代社会が、グローバルな交流と地域的な固有性の多面的な動きのなかで形成していく新しい文化価値のありようを解明する。変動する現代社会の先端的諸現象に積極的にアプローチするとともに、近代が継承してきた社会理論への深い考究とその再構築に向けての創造的理論活動を推進する。</p> | <p>油井 清光</p> <p>藤井 勝</p> <p>白鳥 義彦</p> <p>平井 晶子</p> <p>佐々木 祐</p> <p>○黒田 千晴</p> | <p>アメリカを中心とする社会学理論</p> <p>経験社会学、日本・東南アジア社会論</p> <p>フランスを中心とする社会学</p> <p>家族とライフコース</p> <p>地域社会学、中南米社会研究</p> <p>東アジア諸国の国際高等教育政策</p> | |
| | | <p>美術史学</p> <p>美術史学は、人類の歴史的遺産として今日まで継承され、なお創造され続けている美術作品に対して、様式の分析や図像の解釈、制作過程の解明といったアプローチを行い、それらに関わる人間の営みを明らかにする学問である。地域・時代・民族による多種多様な美術の諸相の独自性を検証し、受容再生のコンテクストに基づく実証的な方法論を展開する。そのためには多くの美術作品にじかにふれることが重要であるが、本大学院では、美術館・博物館と密接に協力し、現場を重視した実践的な教育研究を行っている。</p> | <p>宮下 規久朗</p> <p>増記 隆介</p> | <p>西洋美術史・日本近代美術史</p> <p>仏教絵画史・中国美術史</p> | |
| | <p>地理学</p> <p>地理学は「空間」に関わる事象全般を研究対象とする間口の広い学問であるが、本研究分野はそのなかでも地図史、歴史地理学、文化・社会地理学に焦点をあてている。風景／景観やそれらが描かれた絵図や地図、場所感覚や地域アイデンティティなど生活空間における社会集団の地理的経験および文書・統計・地理情報などを対象とし、そこから様々な空間的課題を読み解いていくのである。院生の主体的なテーマおよびフィールド設定を尊重しつつ、理論・方法論的な潮流を踏まえ、フィールドワークを重視した質の高い修士・博士論文を完成できるよう指導を行う。</p> | <p>藤田 裕嗣</p> <p>原口 剛</p> <p>菊地 真</p> | <p>中・近世の歴史地理学</p> <p>社会地理学・都市論</p> <p>歴史地理学、人間と地理的環境、景観文化財</p> | | |
| | <p>連携講座(文化資源論)</p> <p>文化遺産の重要性に鑑み、文化財学・文化資源学に関する実証的・応用的な教育研究を行う。大和文華館、奈良国立博物館と連携し、実際の博物館運営や文化財保存方法を学ばせる。これによって、情報、人材のネットワークを構築できる学識の幅広さと応用力のある人材を養成する。</p> <p>博物館資料論は博物館における展示企画のための資料の収集法や調査法と、明治の古社寺保存法以来の資料の蓄積と整理法を学ぶ。レントゲン撮影や放射線分析などの最先端の科学的調査法をも合わせて修得する。文化資源保全論では文化財の概念とその修復保存法を伝統的な手法から現代的な手法までを実地演習を交えて学習する。また文化財保護法の歴史と実務を学ぶ。</p> <p>美術文化財論では我国の二千有余年の長い歴史の中で培われた有形文化財の歴史と日本固有の表現を、アジア各地の有形文化財との比較検討を通して研究し、各地の調査現場に向向いたり、実物の調査を交えたりして体験的に研究方法論を確立する。</p> | <p>岩井 共二(客員)</p> <p>吉澤 悟(客員)</p> | <p>日本古代・中世の仏教彫刻史研究</p> <p>日本考古学</p> | | |
| 留學生担当 | | 留學生に対する教育を行う。 | カルメン・タマン 日本宗教文化・比較宗教学 | | |

備考 ○印は国際教育総合センター所属教員を示す。 ◇印は平成29年3月31日付け退職教員を示す。